進化経済学会
ニューズレター NO. 26
May.　2009

進化経済学会事務局
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 4-4-19
国際文献印刷社内
T:03-5389-6493 E:evoeco-post@bunken.co.jp

http://sozai-free.com/sozai/01019.html から引用

＊＊＊＊＊＊＊記事＊＊＊＊＊＊＊

第 13 回進化経済学会・岡山大会開催報告
第 13 回会員総会記録・理事会報告
2008 年度部会活動報告
第 14 回サマースクール・オータムカンファレンスのご案内
学会員名簿異動
研究会・学会案内
J-STAGE セミナー参加報告
「進化経済学 Working Papers」開始のお知らせ
編集後記

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第 13 回進化経済学会
岡山大会サマリー

岡山大会運営委員会
清水耕一（大会委員長）
新村聡（事務局長）
西垣鳴人（事務局）
村井浄信（事務局）
廣田陽子（事務局）

第 13 回進化経済学会は 3 月 28-29 日に岡山大学において「共進化と進化経路の多様性」をテーマに行いました。報告数は 57 件と多く、28 日の午前・午後及び 29 日の午前に計 20 のセッションを開き、またポスターセッションも 8 件と、報告数からすると盛況でありました。報告者はもとより参加された会員によって活発な討論が行なわれ、また懇親会にも 70 名ほどの会員が参加され、全体としては盛況であったと思います。大会参加者は 123 名と地方での大会としては多かったのですが、セッション数に比べて少なく、参加者の少ないセッションも出現し、セッションの組み方に工夫が必要であったのかもしれません。しかし全体として、岡山大会を無事開催することができ、これも研究報告をしていただいた会員、セッションの司会を引き受けてくださった会員、及び討論に参加いただいた大会参加者の皆さまのご尽力・ご協力のおかげであったと感謝しております。

「共進化と進化経路の多様性」をテーマとした本大会におけるセッションの特徴と言えると思いますが、資本主義・経済システム・企業の進化の多様性と制度の問題に関する研究報告が多くなされました。「資本主義の多様性と制度」が 3 セッション、「グローバル化と共進化」、「制度補完性と経済・組織の進化」、「貨幣金融システムの進化」、「コーポレートガバナンスと企業進化の多様性」が各 1 セッションと、計 7 セッション 20 報告ありました。この分野では、日本経済・企業システム・労働の変容に関する問題、開発経済の問題、セキュリティ問題や自動車産業分析への産業連関分析の適用、コーポレートガバナンスに関する具体的な分析、金融機関の行動や証券取引に関する制度変化等の問題が議論されていました。経済システムや企業システムの進化に関する具体的な分析が進み活発な議論が行われたことが報告されていますが、同時に、「方法論の議論から抜け出した後のレベルを挙げる必要性」（セッション司会を務めた宮本光晴会員の感想）の存在する分野も認められました。

資本主義の多様性論に次いで多くの報告がなされたのは、シミュレーション分野及び経済学史分野でした。U マート・セッションではフリーマーケットのマッチング問題の研究報告やキャンベラで外国人（オーストラリア人とはかぎらない）に対して行った U-Mart 実験の報告が行なわれるとともに、中央大学が地元 CATV と共同製作したビデオ「人工市場で学ぶマーケットメカニズム」が上映されました。またマルチエージェントモデル・セッションでは東工大グループによる ABM を用いた分析と政策シミュレーション、ならびにシステムと内部エージョンとの相互作用を通じた新たな論理構造の出現、世論形成のネットワーク分析、貨幣発生に関する安富モデルの制約を緩和した場合の貨幣発生プロセスに関する計 6 報告がなされ、活発な討論が行われていました。他方、経済学史分野では、経済学史的アプローチ・セッションで計 6 報告が行なわれ、特に正統派の設計主義的発送に対抗して市場の自生的な展開を見る異端派に進化思想の源流を探った柴田徳太郎会員の報告が注目されたことが報告されています。経済学史分野では、他に企画セッションとして「進化と選択の合理性」があり、ダーウィンの思想の実像、ライオネル・ロビンズにおける合理性の観念、個人の選択と進化の合理性及び遺伝子進化の中立説の経済学方法論上の問題等が議論されていました。

以上に加えて、本大会においても学会員の中で一定の潮流を形成しているイノベーション・システム研究、非線形動学研究、地域研究に関するセッションがありまし

た。イノベーション・セッションではイノベーション研究の２つの系譜の紹介、川崎のインキュベーション施設に関する実証分析による日本のベンチャー企業の起業行動の特徴，H. サイモンらの「人工物」の進化という視点によるイノベーションの再解釈といった３報告が行われた。非線形動学セッションは 2 報告ではあったが、進化ゲームに確率的環境を導入した数学モデルを用いた共進化と多様性の問題の新しい展開や、ヒックス『資本と時間』で先鞭を付けられた、ひとつの恒常成長状態から別の恒常状成長状態へのトラバース(移行過程)をめぐる数値シミュレーションによる研究成果の報告といった、意欲的かつオリジナリティの高い優れた報告がありました。また地域研究は第８回の福井大会以来定着してきた感がありますが、今大会の地域セッションでは、市町村地域産業連関表の作成と地域産業構造の比較調査研究、自治体のブランディング政策と地域の中小企業ネットワークに関する地域間比較、地域 SNS における友達とコミュニティの形成要因分析についての興味深い３報告がなされていました。

最後に本大会において新たに登場したセッション・テーマを紹介しておきます。一つは新たに組織された観光学部会による観光学セッションであり、同セッションでは産業観光と地域づくり、安全の視点、観光形態の考察といった重要なテーマで観光の成長には欠かせない分野の３報告が行なわれました。日本において観光は研究対象としても実務としても欧米に比較して未成熟で幼児段階であると認識したうえで、観光学の発展を期した意欲的な報告であり、フロアからも活発に手があがり興味深い議論が展開されたことが報告されています。もう一つは、塩沢由典会員のイニシアティブで組織された「会計の制度設計と進化経済学」セッションです。このセッションでは、進化経済学会的アプローチからの会計学の教育研究への貢献の可能性という問題提起、時価会計基準が世界同時不況に与えた負の効果、会計制度と現実の制度との共進化過程、トヨタの原価企画という管理会計技法の伝播過程に関する３報告と活発な議論が行われた。本セッションは第２日目の午前セッションにもかかわらず、総計 50 名程度の参加があり、諸分野の碩学を含め活発な質疑応答がなされたことが報告されています。最後に、企画セッションではなかったが偶然にでき上がった興味深いセッションとして「トランザクションエコノミックスの可能性」があります。同セッションではトランザクションベースエコノミックスの構想、トランザクションデータによる民間企業活動のマクロ的付加価値計測の問題、トランザクションコストの実測問題等に関する３報告が行われ、今後この分野での研究の進展が期待できます。

本大会２日目の午後には、共通テーマによる講演ではありませんでしたが、二人の方に特別講演をお願いした。特別講演（１）では、日韓の進化経済学会交流のためにお招きした建國大学校のチェイスン・リン教授に招待講演、Low cost disruptive innovation model in India - Tata Motor’s New Car、を行っていただきました。リン教授は、圧倒的に廉価な自動車を市場に投入するという革新的な行動をとったインドのタータ・モーターにみられるイノベーションの特質は、単純化・低コスト化の方向に開発能力を育成するものであり、イノベーションは製造過程だけでなく、開発過程にも及んでいるということを示され、このような低コスト化の開発は、モジュラー化しながら数度にわたる統合設計によって可能になっていることを説明されました。特別講演（２）では元日本経済学会会長であり、わが国の格差問題の第一人者である橘木利詔同志社大学教授に招待講演「経済学の過去、現在、今後」を行っていただいた。橘木教授は、まず経済学による日本の貧困問題の研究状況について概説され、最低賃金制度と生活保護制度を手がかりに「必要」に応じた賃金・所得の支払というテーマを展開され、貧困問題の解決に経済学が貢献する必要を説かれました。

以上のように、２日間にわたる進化経済学会岡山大会は無事終了することが出来ました。

進化経済学会第 IV 期

第７回・第 V 期第１回

合同理事会記録

【記録者：八木紀一郎】

日時：２００９年３月２８日（土）１２時から１３時２０分

会場：岡山大学法学部大会議室（法経２号館２階）

第 IV 期第７回理事会として、会長・副会長・ 21 理事出席、委任 4 理事。

第 V 期第１回理事会として、会長・副会長・ 23 理事出席、委任 2 理事。

１．進化経済学会第 IV 期第７回･第 V 期第１回合同理事会は、２００９年３月２８日（土）１２時から１３時２０分、岡山大学法学部大会議室を会場として開催された。

２．最初に、中原選挙管理委員長から昨秋おこなわれた役員選挙の結果が報告された。なお、結果の発表において手違いがあり訂正発表した経過について説明があり、それとかかわって選挙方式の検討が問題提起された。

３．〔新理事会事項〕吉田新会長から、前日の常任理事会の検討をへて、有賀理事、磯谷理事、井庭理事、植村理事、 宇仁理事、江頭理事、澤邉理事、清水理事、西部理事、吉田（雅明）理事を常任理事とする提案がおこなわれ了承された。（そのうち井庭会員は欠席であったの で、事後に本人の承諾を得た。なお、八木前会長は顧問格で常任理事会を補助する。）また、監査委員は V 期も引き続き、服部、安孫子会員に委嘱した。

４．会員状況の報告があった。退会者６名、年度末退会者７名であるが、第 IV 期第６回理事会での資格承認者が 10 名、当第７回理事会で資格審査される入会希望者が 13 名いるので、入会・退会の手続き後の会勢は個人会員 384 名（休会 2 名含む）、院生会員 95 名（休会 3 含む）、賛助会員（団体・特別 1 ）、招待会員 2 名で、計 482 会員になる。

５．入会希望者 13 名について従来から適用した基準に照らして入会資格あるものとした。

＜総会記録６入会者リスト参照＞

６．澤邉常任理事から、 2008 年度の会計状況の報告があり、それをふまえて平成 21 （ 2009 ）年度の予算案の提案がなされ、審議の結果承認された。英文誌に補助金がついていないものとして予算をたて、予備費を 100 万円計上すると、この年度

の繰越額は 955000 円と大幅に減少する。雑誌の購読獲得と経費節減の努力が要請された。なお、予備費の支出については常任理事会で決済し、理事会に事後報告する。

＜予算概要は総会記録８を参照＞

７．第１３回大会は百数十人の参加を経て、順調に進行していると運営委員会から報告された。第１４回大会の開催大学である四天王寺大学に所属する中原会員から、サマースクールを９月１９日、オータムコンファレンスを９月２０日、第１４回大会を 2010 年３月 27-28 日に開催したい、またテーマとして「企業組織と社会福祉レジームの共進化」をとりあげたいと説明された。

８．国際英文誌 EIER の有賀編集委員長から第５巻１・２号の刊行状況が説明され、創刊５周年を経たので国際ボードメンバーなどにアンケートをおこなうなどの企画が進行していると説明があった。また、江頭編集委員から、 EIER への若手の投稿促進や英文論文のスキルアップのために、「進化経済学会 Working Papers 投稿・指導システム」（仮称）を編集委員サイトに開設したいとして、理事会にその承認と理事の支援・参加が求められ、理事会としてそれを了承した。

９．経済学会連合へは、有賀裕二理事と吉田雅明理事を評議員として送る。その他、KOSIM との提携や、今後おこりうる他組織との協働については常任理事会で審議しておこなうと説明があった。

１０．部会報告は、書面でおこない、『ニューズレター』で会員に知らせる。

進化経済学会

第１３回会員総会記録

【記録者：八木紀一郎】

１．進化経済学会第１３回会員総会は、２００９年３月２９日（土）１３時から１４時まで、岡山大学５０周年記念館で開催された。

２．会員総会の議長として、吉田雅明会員が推薦され、承認された。

３．中原選挙管理委員長から昨秋おこなわれた役員選挙の結果が報告された。なお、結果の発表において手違いがあり訂正発表した経過について説明があり、それとかかわって選挙方式の検討が問題提起された。

４．吉田新会長と藤本新副会長から就任挨拶があった。吉田新会長から、有賀理事、磯谷理事、井庭理事、植村理事、 宇仁理事、江頭理事、澤邉理事、清水理事、西部理事、吉田（雅明）理事を常任理事としたと報告された。（そのうち井庭会員は欠席であったので、事後に本人 の承諾を得た。なお、八木前会長は顧問格で常任理事会を補助する。）また、理事会は、服部、安孫子会員に第 V 期も引き続き監査委員を委嘱した。

５．会員状況の報告があった。退会者６名、年度末退会者７名であるが、第 IV 期第６回理事会での資格承認者が 10 名、当第７回理事会で資格審査される入会希望者が 13 名いるので、入会・退会の手続き後の会勢は個人会員 384 名（休会 2 名含む）、院生会員 95 名（休会 3 含む）、賛助会員（団体・特別 1 ）、招待会員 2 名で、計 482 会員になる。

６．第７回理事会で入会資格あるとされた以下の入会希望者 13 名を新会員として迎え入れた。

田中啓太（名古屋大学・院）、 Georg Blind（ 京都大学・院 ）、上浦基（東京理科大）、庄子真岐（東北大学・院）、佐藤健太郎（千葉大学・院）、荒巻英司（千葉大学・特別

研究員）、木村典弘（千葉大学・院）、小笠原春菜（千葉大学・院）、佐々木一彰（日本大学・経済）、慎公珠（ New York Univ. ）、三輪仁（京都大学・院）、郷田慎一（東京大学・院）、丸田起大（九州大学・経済）

７． 2007 年度の決算が示され、監査委員の評価を求めた上で、それを承認した。

＜ニューズレター２５号掲載済み＞

８．澤邉常任理事から、平成 21 （ 2009 ）年度の予算案の提案がなされ、審議の結果承認された。英文誌に補助金がついていないものとして予算をたて、予備費を 100 万円計上すると、この年度の繰越額は 955000 円と大幅に減少する。予備費の支出については常任理事会で決済し、理事会に事後報告すると説明された。

＜予算概要＞

収入

前年度繰越（見込み）	2,550,000 円
会費	4,350,000 円
計 ＊	6,900,000 円

支出

大会費	1,000,000 円
英文誌刊行費 ＊	2,100,000 円
通信費	200,000 円
交通費	200,000 円
事務雑費	50,000 円
謝金	40,000 円
送金手数料	20,000 円
会議費	100,000 円
印刷費	200,000 円
事務委託費	600,000 円
国際交流費	100,000 円
部会補助費	300,000 円
経済学会連合	35,000 円
予備費	1,000,000 円
小計	5,945,000 円
平成 22 年度への繰越	955,000 円
計	6,900,000 円

（ ＊ 英文誌に科研費助成金がつかない場合を想定）

９．第１３回大会は順調に進行していると大会運営委員会から報告された。第１４回大会の開催大学である四天王寺大学に所属する中原会員から、サマースクールを９月１９日、オータムコンファレンスを９月２０日、第１４回大会を 2010 年３月 27-28 日に開催したい、またテーマとして「企業組織と社会福祉レジームの共進化」をとりあげたいと説明された。

１０．国際英文誌 EIER の有賀編集委員長から第５巻１・２号の刊行状況が説明され、創刊５周年を経たので国際ボードメンバーなどにアンケートをおこなうなどの企画が進行していると説明があった。また、江頭編集委員から、 EIER への若手の投稿促進や英文論文のスキルアップのために、「進化経済学会 Working Papers 投稿・指導システム」（仮称）を編集委員サイトに開設したいとして、理事会にその承認と理事の支援・参加が求められ、理事会としてそれを了承した。

１１．経済学会連合へは、有賀裕二理事と吉田雅明理事を評議員として送る。その他、

KOSIM との提携や、今後おこりうる他組織との協働については常任理事会で審議しておこなうと説明があった。

１２．部会報告は、書面でおこない、『ニューズレター』で会員に知らせる。

１３．最後に、八木会長から離任の挨拶があった。

2008年度部会活動報告

「制度とイノベーションの経済学」部会

2008年度の「制度とイノベーションの経済学」部会の研究会は以下のとおりです。

（１）日時：6月28日（土）午後2時～5時
場所：河合塾京都校
報告者：

1. 内橋賢悟（流通科学大）「５０～６０年代の韓国金融改革と財閥形成--「制度移植」の思わざる結果」
   参考：内橋賢悟『５０－６０年代の韓国金融改革と財閥形成--「制度移植」の思わざる結果』（新評論・2008年）
2. 川村哲也（京都大学・院）「人間の推論能力の限定性を制度が補完する」

（２）日時：10月11日（土）午後2時～5時
場所：河合塾京都校
報告：

1. 西本和見（名古屋大学・院）「政治学における合理的選択論の方法的多様性－経済学帝国主義の再考－」
2. 宇仁宏幸（京都大学）「IT 化・グローバル化と賃金格差拡大との関連」

（３）日時：11月8日（土）午後2時～5時
場所：河合塾京都校

1. 田中歩鮎夢（京都大学・院）　“The Internationalization of Japanese Firms: New Findings Based on Firm-Level Data”
2. Olivier Weinstein（パリ第13大学）「知的所有権の制度分析」

「現代日本の経済制度」部会

日時　２００８年　４月２６日（土）　１３時から１８時まで
場所　京都大学　経済学部研究棟　１０１演習室

報告テーマおよび報告者
１．”Change in institutional hierarchy in open economy and economic growth.”
西　洋氏（九州大学）
コメンテーター　金子裕一郎氏（龍谷大学）

２．「ミュルダール人口論における「消費の社会化」」
藤田菜々子氏（名古屋市立大学）
コメンテーター　鍋島直樹氏（名古屋大学）

３．「賃金調整、技術進歩、構造変化」（仮題）
藤田真哉氏（名古屋大学）
コメンテーター　宇仁宏幸氏（京都大学）

日時：２００９年　２月１５日（日）１３時から１７時まで

テーマ：山田鋭夫著『さまざまな資本主義』藤原書店、合評会
評者：若森章孝氏（関西大学）
　　原田祐治氏（名古屋経済大学）

北海道・東北部会

場所：東北大学川内南キャンパス　文科系総合研究棟４F　４０２号室
日時：2008 年 8 月 28 日（木）～29 日（金）

プログラム：

［8 月 28 日（木）］
14:00～15:30
自己紹介を兼ねて、各人の研究を簡単に紹介。（一人 10 分以内）
15:30～16:30
吉田昌幸氏（北海道大学大学院生）
「企業家競争論における市場と企業」
16:40～18:10
河野善文氏（道都大学）
「製品のあいまいな特性と差別化」

［8 月 29 日（金）］
10:00～11:00
小林大州介氏（北海道大学大学院生）
「技術革新と人工物進化」
11:10～12:10
浅沼大樹氏（東北大学大学院生）
「On the Bank Behavior as a Determinant of a Firm's Decision Making」
12:10～13:40
昼食
13:40～14:40
松山淳氏（東北大学大学院生）
「アマルティア・センの社会的選択理論と規範理論の関連性についての一考察」
14:50～15:50
小林重人氏（北陸先端科学技術大学院大学院生）
「貨幣意識－地域通貨関係者 VS 金融関係者」

・最初に各自 10 分の持ち時間で自分の研究を簡単に紹介し，質疑応答を行った。同じ学会や部会に所属していても，お互いに何をやっているか知らないことが少なくないので，こうした機会は貴重である。その後，部会の若手・院生を中心に研究報告をしてもらった。話題とアプローチは多様であったが，活発な議論がなされた。

・Yuri Biondi 氏による進化経済学セミナー
場所：北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟 W304 教室
日時：10 月 8 日（水）16:00～18:00
タイトル:"Economics, Accounting and Law of the Firm as an Enterprise Entity"

Yuri Biondi 氏は会計学・財務論を専門とするが，同時に学際的アプローチ研究を進めている。
今回は，会計・財務の視点から企業制度の進化について報告された。

・Bertrand Roehner 氏による進化経済学セミナー
場所：北海道大学　軍艦講堂 1 番教室
日時：2008 年 11 月 21 日（金）16：00～18：00
タイトル："The strange fate of Keynesian economics"
"The maximization of contacts seen as a general principle for the evolution of societies"

Roehner 氏は経済物理学が専門であるが，経済学の造詣も深い。今回は，ケインズ経済学の歴史的役割の変遷について報告された。

・Bertrand Roehner 氏による「大学院生のための経済物理学入門」
場所：北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟 W304 教室
日時：2008 年 11 月 22 日（土）14：00～16：00
テーマ："Was there a phase transition in the United States around 1975？"

大学院生を対象にしたセミナーとして
1975 年におけるアメリカの相転移についてお話しされた。

以上をもって，北海道・東北部会の活動報告とします。

観光学研究部会

平成 21 年度における観光学研究部会の活動であるが、３回の研究会を行った。

日時　2008 年 6 月 27 日（金）　18:30～20:00
場所　近畿大学東京事務所
講演１　有賀 敏典（東大・院）″スケジュール選択モデルの観光交通行動分析への適用″
講演２　金田直樹（農林水産省）″農林水産業の第６次産業化としての観光業との融合″

日時　2008 年 12 月 18 日（木）　18:30～20:00
場所　近畿大学東京事務所
講演１　【招待講演】鈴木晃志郎（首都大学東京）“人の流れが音楽をつくる”
講演２　庄子　真岐（東北大・院）“外来資源を活用した地域振興に関する一考察”

日時　2009 年 3 月 27 日（金）　18:30～20:00
場所　岡山国際交流センター
講演１　越野清実（プラスリラックスアートクラブ）“美術館利用におけるソーシャル・イノベーションの可能性　～　鑑賞者の自立的行動に関する実践的研究”
講演２　田中克彦（岡山市経済局観光課）“岡山市の観光政策について”

非線形問題研究部会

活動は電子メイリングリスト evoecojapan のほかに、有賀のホームページ（http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~aruka/activities.html）で案内しています。

１．研究会セミナーの開催

進化経済学会非線形問題研究部会 2008 年度　No. 1

日時　2008 年 7 月 23 日（水）18:00-21:00
場所　中央大学駿河台記念館 220 号室
講師　塩沢由典氏（中央大学商学部教授）
論題　未然形で語る金融市場の経済学／サブプライムと金融工学の底に潜むもの

進化経済学会非線形問題研究部会 2008 年度　No. 2

主催　中央大学企業研究所公開研究会
日時　2008 年 11 月 7 日（金）14:30-16:00
場所　中央大学後楽園キャンパス 6 号館 6401 階
講師　Peter Erdi
(Professor, Kalamzoo College US; Head: Department of Biophysics KFKI Research Institute for Particle and Nuclear Physics of the Hungarian Academy of Sciences)
論題　危機、技術革新、意志決定の複雑系理論
Lessons from Complex Systems Modeling: Crisis, Innovation, Decision Making

進化経済学会非線形問題研究部会 2008 年度　No. 3

主催　中央大学企業研究所公開研究会
日時　2008 年 11 月 29 日（土）15:00-17:00
場所　中央大学駿河台記念館 220 号室
講師　Bertrand Roehner
（パリ第 7 大学教授および LPTHE, University Paris 6）

論題　社会・経済の相互作用の測定技術
Techniques for Measuring Social and Economic Interactions

進化経済学会非線形問題研究部会 2008 年度　No. 4

主催　中央大学企業研究所公開研究会
日時　2009 年 3 月 4 日（水）15:00-17:00
場所　中央大学多摩校舎 2 号館 4 階研究所会議室
講師　Klaus Mainzer
（ミュンヘン工科大学教授、Carl von Linde-Aademie 所長、ヨーロッパ科学アカデミー会員、ドイツ複雑系・非線形力学会会長）
論題　Callenges of Complexity in the 21st Century

２．国際会議の開催の報告とアナウンス

年度は 2007 年度になるが、2008 年 3 月 13-15 日に中央大学駿河台記念館において、3rd International Nonlinear Science Conference を開催した。

また、2009 年度は 11 月 4－7 日に、中央大学駿河台記念館において 2009 Complex 09: The 9-th Asia-Pacific Complex System Conference を開催する予定である。詳細は http://www.nda.ac.jp/cs/complex09/ を参照してください。

３．会計報告

収入の部

繰越金	278	前期より繰越
部会補助費	50,000	
収入合計	50,278	

支出の部

会場費	11,024

（企業研究所の主催であっても、駿河台記念館の利用については補助は行われない。）

次期繰越	39,254
支出合計	50,278

以上のとおり相違ありません。

非線形問題研究部会　有賀裕二（文責）

3rd International Nonlinear Sciences Conference
Application in Behavioral, Social & Life Sciences

Society for Chaos Theory in Psychology & Life Sciences

(SCTPLS)

Japan Association for Evolutionary Economics(JAFEE)

Chuo University, Faculty of Commerce

Welcome You to the 3RD INSC 2008

Venue

Surugadai Memorial Hall

Chuo University, Faculty of Commerce, Tokyo, Japan

Sponsors

Society for Chaos Theory in Psychology & Life Sciences
http://www.societyforchaostheory.org

Faculty of Commerce, Chuo University
http://www2.chuo-u.ac.jp/global/index.html

Japan Association for Evolutionary Economics
http://www2.chuo-u.ac.jp/global/

Message from the SCTPLS President and the INSC

Welcome to the 3rd International Nonlinear Sciences Conference (INSC). The INSC tradition started in February 2003, in Vienna, Austria and continued in March of 2006 in Heraklion, Crete, Greece. This year, Tokyo, Japan serves as the venue for our 2008 conference.

The Society for Chaos Theory in Psychology & Life Sciences (SCTPLS), as the primary organizer, is fortunate to be in alliance with Chuo University, Faculty of Commerce and the Japan Association for Evolutionary Economics (JAFEE) to bring you the INSC-2008. Our mission, like in previous years, is to gather to celebrate a global scientific and scholarly community committed to the study of nonlinear dynamics.

The event reflects a commitment on the part of our organizations to facilitate international collaboration and to encourage the cultivation of scientific partnerships across the globe. We are able to offer you a rich and varied program, covering a wide range of scholarly disciplines including theoretical as well as applied approaches. It attests to the international character of our scholarly community that we have presenters from many countries to share their work in nonlinear dynamics, including scholars from the U.S., Eastern and Western Europe and Asia. We hope that this conference will become part of a long-standing tradition of international scholarly exchanges, which surely will strengthen our nonlinear dynamical systems community, and in the long run influence our work.

I want to thank the INSC committees for their excellent work and dedication in making this conference a success! To all participants, thank you for honoring us with your presence! I hope you enjoy the scientific exchanges as much as the exquisite beauty our venue has to offer.

Ivelisse Lazzarini, OTD, PhD

Chair, 3rd INSC 2008

President Society for Chaos Theory and Life Sciences

http://www.societyforchaostheory.org

企業・産業進化研究会発足のお知らせ

このたび藤本隆宏副会長を囲み、塩沢理事、吉田理事、植村が、４月１５日に東京で会合を持ちました。そこで、次のようなかたちで、新しい研究会（＝部会準備会）を定期的に開催することを決めましたので、ご報告申し上げます。

〇藤本隆宏先生を中心に、「企業・産業進化研究会」を定期的に開催し、部会創設の準備を行ないます。

〇「企業・産業進化研究会」は、東京大学ものづくり経営研究センターで、以下の日程で開催します。

５月２０日（水）　６時３０分から
７月２２日（水）　６時から
１０月１４日（水）　６時から

〇研究会は、将来的には部会へと発展させることが展望されていますが、当面は生産システム、エージェント・ベースモデル、企業組織進化、産業動態などを主要なテーマとして、経済学と経営学とを総合した観点から研究交流をすすめていきたいと考えています。

塩沢理事、吉田理事と相談のうえ、まずは新研究会の発足についてご報告させていただきました。

理事：植村博恭
（横浜国立大学企業成長戦略センター）

2009年度サマー・スクールおよびオータム・コンファレンスのご案内

会員の皆様におかれましては益々ご健勝のことと存じ上げます。本年度のサマー・スクールおよびオータム・コンファレンスを、以下の要領で四天王寺大学において開催致します。会員の皆様におかれましては、どうぞ奮ってご参加下さいますようよろしくお願い申し上げます。なお、サマー・スクールとオータム・コンファレンスの会場は異なりますのでご注意下さい。

１．サマー・スクール　概要

2009年9月19日(土)、午後より第5回サマー・スクールを開催いたします。お忙しいところ申し訳ありませんが、万障お繰り合わせの上、ご参加頂ければ幸いです。今回も昨年に引き続き、若手研究者育成を主眼といたしまして、2部構成で開催いたします。開催時間など詳しい内容はメーリングリストで随時お知らせいたしますが、現在の所確定しているのは、以下の内容です。皆様が指導されている院生の皆さんや、ポスドクなどの若手研究者の皆さん、是非ご参加ください。学会員の方はもちろん、学会員でない方の参加も歓迎します。

場所：四天王寺大学・藤井寺駅前キャンパス
近鉄南大阪線藤井寺駅下車

第1部：進化経済学と進化ゲーム理論（仮題）

午後1時から午後2時半：大浦宏邦准教授(帝京大学)：TBA
午後3時から午後4時半：秋山英三准教授(筑波大学)：TBA

第2部：研究論文を書き上げるために
午後5時から午後6時半：小山友介准教授(芝浦工業大学)

参加締め切り：9月1日
申し込み方法：下記問い合わせ先に電子メールを送って下さい。
問い合わせ：小川一仁(大阪産業大学 kz-ogawa@eco.osaka-sandai.ac.jp)

２．オータム・コンファレンス　概要

本年度のオータム・コンファレンスは、2009年9月20日（日）１０時～１７時、以下の要領で開催いたします。

場所：四天王寺大学　大学キャンパス・６号館
（末尾の交通案内をご参照下さい）

①リレーセッション（新規セッション）：１０時～１２時
「フリー・スピーチ
――新奇的・領域横断的・萌芽的研究の連続プレゼンテーション――」

従来から全国大会開催時にポスター・セッションが行われてきましたが、口頭で気軽に報告できる場として、リレー方式によるごく簡単なプレゼンテーション（５～１０分程度）を行って頂くセッションを、今回のオータム・コンファレンスにおいて設定しました。
これは、「今構想中の研究があるが、大会セッションで報告するに至っていない」、「斬新な発想であるが、論文にとりまとめるまで至っていない」、「研究対象が複数の領域を横断し

ているので、専門家の意見を聞きたい」等、研究テーマの深化や整理の途上におられる会員の方々に発表をして頂くためのセッションです。もちろん参加にかかわって、ヴェテラン、若手研究者、院生といった区分は一切設けられていません。

したがいまして、報告希望の方に予めレジュメを提出して頂くことも求めません。報告時（必要であれば）パワーポイント・ファイルなどを USB などでお持ち頂くだけで結構です。また報告を希望されない会員の方も、議論を盛り上げるため是非ともご参加下さいますよう心よりお願い申し上げます。

②特別報告セッション：１３時～１７時
共通テーマ「企業組織と福祉レジームの現在：それぞれの現場から」
総合司会：平野泰朗氏（福岡県立大学）

第一セッション　(13 :00～14 :00)
報告者：藤本隆宏氏（東京大学：本学会副会長）
演題：「制約条件、人材確保、および設計思想・組織能力の進化」

第二セッション　(14 :15～15 :15)
報告者：宮本太郎氏（北海道大学）
演題：「福祉レジームの転換と雇用システム　北欧と日本」

第三セッション(15 :30～16 :30)
報告者：中村健吾氏（大阪市立大学）
演題：「ＥＵとその加盟国における積極的包摂とフレキシキュリティの展開」（仮題）

まとめと質疑応答（16 : 30 ～17:00 ）

＊特別報告セッションの後、懇親会を本学６号館１階レストランにて行います。(17:15 ～ 19:15)

３．オータム・コンファレンス報告・参加の申し込みについて

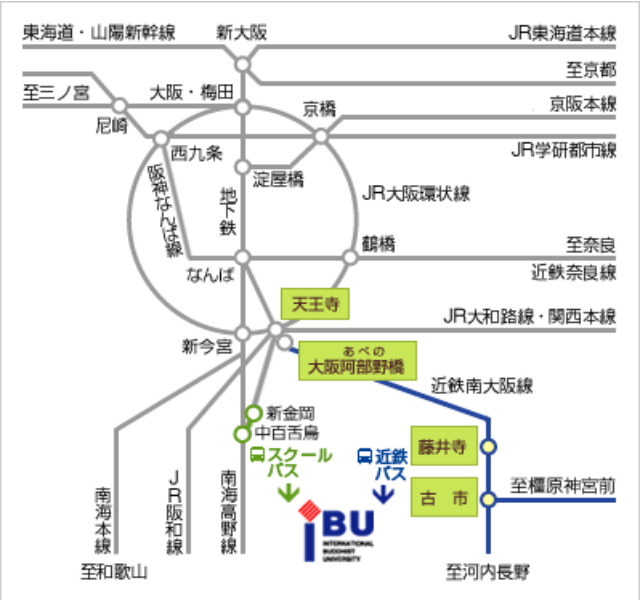
オータム・コンファレンスのリレーセッション報告を以下の日程で募集致します。どうぞ奮ってご応募下さいますようよろしくお願い申し上げます。またコンファレンスの参加人数を把握するために、ご参加下さる方は必ずその旨ご連絡下さいますようご協力のほどお願い申し上げます。

（１）　リレーセッション報告について
ご希望の方は、２００９年９月５日までに以下の大会メールアドレス宛にご連絡下さい（shinka@shitennoji.ac.jp)。その際①お名前、②御所属（および希望連絡先）、③報告テーマ、を記入の上、お申し込み下さい。
なお当日の飛び入り参加も歓迎致します（ただし申込状況により、ご希望に添えないことがあります。その場合は、HP およびメーリングリストにて予めご連絡致します）。

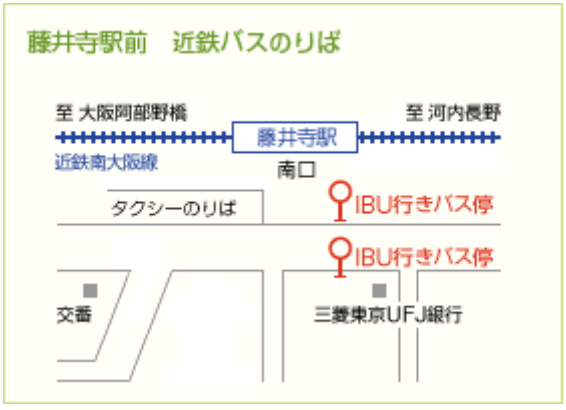
（２）　オータム・コンファレンス参加について
当日本学の食堂は休業で、大学周辺には食堂・レストランの類が一切ありません。つきましては恐縮ですが、午前のセッションから参加される方は弁当を用意致しますので、必ずご予約下さい。なお、懇親会の都合もありますので、午前・午後を問わずコンファレンスに参加される

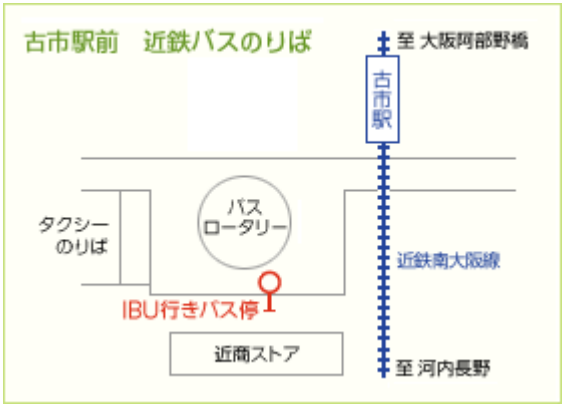
方は、大会メールアドレス（shinka@shitennoji.ac.jp）へ、８月末日までにその旨必ずご連絡下さい。詳細はHPに掲載致します。

＜交通案内＞



「藤井寺」駅前、「古市」駅前より近鉄バス「四天王寺大学」行きに乗ると約15分で大学に着きます（終点）。**※藤井寺駅、古市駅ともに、バス停へは改札を出て右へお進みください。** なお上記地図中のスクールバスは利用出来ません。





なお、大学（羽曳野）キャンパスには駐車場が完備されております。お近くの方で、お車でお越しの方は大学隣にある駐車場をご利用下さい。ただし、藤井寺駅前キャンパスには駐車場はありませんのでご注意下さい。

司 会　　加瀬和俊（東京大学）・萩原伸次郎（横浜国立大学）

趣　旨

サブプライム問題に端を発し、昨秋のリーマン・ショックによって瞬く間に世界中に拡散した金融危機は、金融面から企業業績・雇用・消費などの実体経済にまで波及し、世界経済全体にきわめて深刻な影響を及ぼしつつある。この危機に対して各国政府・中央銀行・国際機関は、政策スタンスをそれまでの「新自由主義的立場」から「国家主義的立場」へと転向しながら、流動性の確保や公的資金による資本注入などといった包括的銀行救済策のみでなく、超大型の財政出動を含む政策の総動員によって対処しようとしている。政策対応は一見迅速であり、その規模もかつてない巨大なものとなっているが、当面の止血策としての限定的な効果にとどまっている。しかも金融と実体経済とのネガティブフィードバックは激化するばかりで収束の展望はいっこうにみえず、金融危機は「100 年に 1 度」というアレゴリーが現実味を帯びるほどの歴史的な性格のものへと発展しつつあるかにみえる。

今次の世界金融危機は、歴史が大きく転換しつつある予兆として広く受けとめられている。とくに政策イデオロギーの面では、1980 年代以降、長期間にわたって先進工業国・途上国・移行国であれほど支配的であった「新自由主義」、「市場原理主義」、「グローバリズム」からのパラダイムシフトを求める性格のものであるとの指摘もなされている。

ところで、政治経済学・経済史学会はこれまでの春季総合研究会において「自由と公共性－介入的自由主義の時代とその思想的起点」（2008 年）、「グローバル下の自由貿易協定(FTA)－NAFTA の現実とアジアの課題」（2004 年）、「グローバル下の自治体再編」（2003 年）などといったテーマで「新自由主義的」政策イデオロギーとその下での政策展開をとりあげ、また日本経済・世界経済(資本主義)の局面ごとに「“平成不況”の現局面」（1999 年）、「国際通貨・金融危機の現局面」（1988 年）、「1970 年代以降における国際通貨・金融危機の構造」（1986 年）など、危機の実態・要因・構造等を対象としてきた。

今回の春季総合研究会テーマ「“世界金融危機”の歴史的位相」の目的は、土地制度史学会以来のこうした学問的伝統をふまえたうえで、眼前で進行しつつある危機に関する自由な討論の場を設定し、この危機を世界史的なパースペクティブの中で立体的に位置づけようというところにある。

討論を貫く共通の「問い」は「この“危機”はいかなる時代の終焉を意味しているのか」あるいは「この“危機”はどのような時代の矛盾・弱点の露呈であるのか」という点に求められる。ただし、他方では、今次の金融危機は、ほんとうに世界史に転換をもたらすような“危機”であるのか、という「問い」もまた禁じえない。そこで討論の参照枠として、「歴史的位相」を捉えるための 4 つのタイム・スパンを提示しておきたい。

①イギリスからアメリカへの覇権国の交替期と対比させて今次の金融危機を捉える（超）長期的な視点（100 年を超えるタイム・スパン）。

②1929 年恐慌と今次の金融危機とを対比させて論じようとする長期的視点（80 年のタイム・スパン）。この視点には、1980 年代以来の「新自由主義」政策からの転換(の可能性)という中期（20～30 年）的視点が重層している。

③戦後パックス・アメリカーナとその衰退がもたらしたグローバル資本主義化の問題として今次の経済危機をとらえようとする、もうひとつの長期的視点(60 年のタイム・スパン)。

④1980 年代以降の「新自由主義」政策のもとで、間歇的に、繰り返し発生してきた金融危機の一環として位置づける視点。

「制度とイノベーションの経済学」部会は，以下の要領で研究会を行ないます。

（前回，「インフル」の影響で延期となっていたものです）

日時：7 月 5 日（日）午後 2 時～5 時

場所：河合塾京都校（地下鉄烏丸線「烏丸御池」下車徒歩５分）

報告者：

１．武田壮司（京都大学研修員）「制度におけるイノベーション・プロセスの相互作用－シュンペーターの『景気循環論』を中心に－」
２．清水耕一（岡山大学）「フランスにおける35時間労働制の実態－法と労使関係」

関心をお持ちの方はふるってご参加下さい。また，部会終了後には懇親会をもちたいと思います。

問い合わせ先:徳丸　宜穂(名古屋商科大学)
E-mail: norio-t@mbox.kyoto-inet.or.jp

9th Asia-Pacific Complex Systems Conference How to Manage Complexity?

November 4-7, 2009
Surugadai Memorial Hall, Chuo University
Tokyo, Japan sponsored by Chuo University

Aims:
This series of conferences attracts leading researchers and practitioners from Asia-Pacific regions and overseas, and focuses on all aspects of complex systems. The main theme of COMPLEX 09 is "How to Manage Complexity". Theory and technology presented at Complex'09 will be of interest to researchers and practitioners who want to know about both theoretical advances and the latest applied developments in Complex Systems. The conference seeks original research and application papers for peer review publication in any area of Complex Systems.
All accepted papers are included in the conference proceedings (CD-ROM), and selected papers will be published as the special issues of Advances in Complex Systems and Journal of Economic Interaction and Coordination.

Scope:
-Complexity in Biology
-Complexity in Business and Marketing
-Complexity in Economics and Finance
-Complexity in Engineering Systems
-Complexity in Nature
-Complexity in Organization
-Complexity in Physics
-Complexity in Social Systems
-Complex Networks
-Social Networks
-Agents and Complex Systems
-Control of Cascading Failures
-Diffusion Dynamics
-Epidemic Dynamics
-Human Behavior Dynamics
-Innovation and Marketing
-Management of Networked Systems
-Optimization in Complex Systems
-Synchronization
-Traffic Management
-Web Intelligence

Important Dates
Special Session proposals
June　30, 2009
Tutorial proposals
June　30, 2009
Paper submissions
July　31, 2009
Notification of acceptance
August　31, 2009
Final paper submission
October　20, 2009

More details are announced at the conference website
http://www.nda.ac.jp/cs/complex09

Conference Co-Chairs
Professor Yuji Aruka　Chuo University
Professor Akira Namatame　National Defense Academy of Japan

Contact person: Associate Prof. Hiroshi Sato (National Defense Academy), e-mail: hsato@nda.ac.jp.

J-STAGE セミナー参加報告

独立行政法人科学技術振興機構(JST)
J-STAGE セミナーのご案内

◇日時・会場
日時：平成 21 年 3 月 23 日（月）13:45～16:45
（受付：　13:20～）
場所：ベルサール九段　（３Ｆルーム 1，２）
◇次第（予定）
１．開会の辞
２．インパクトファクターについて　トムソン・ロイター社
３．　学協会様事例紹介
日本薬物動態学会様
日本リンパ網内系学会様
４．質疑応答
５．閉会の辞

インパクトファクターについてよくわからないことが多かったので、参加は有益であった。とにかく、まずEIERを3年間以上送り続けて、トムソン・ロイター社の Web of Science に掲載してもらえないと、インパクトファクター自体が算出されません。これが先決です。

Web of Science 掲載誌の 6000 誌中、インパクトファクターは 1 以下が半数以上だそうです。ここでも完全にべき分布が働いており、引用の半数以上が 300 誌に集中
300 誌の全論文のうち約 1/3 の論文に引用が集中
引用されている論文の 95 パーセントが 3000 誌に集中という結果になっています。ということは、引用率が高くなくても Web of Science に掲載してもらえる可能性があるということのようです。引用率自体は、ジャンル、分野によって相当異なるので、ジャンルや分野間の比較は無意味だそうです。トムソン・ロイター社の説明も、被引用率は素朴な指標であり、論文の重要度とは異なるという見解で、本日のセミナーでも何度もこのことを繰り返していました。

報告要旨

(1)インパクトファクターは、トムソン社（現トムソン・ロイター社）の私的な定義であること、創業者 Garfiled が個人事業として重要なジャーナルについて売り込む事業を計画したことから、発案されたものがインパクトファクター（以下、IF）であったが、計画自体が個人事業のレベルをはるかに凌ぐものであったので、トムソン社としての取り組みになった。

(2)インパクトファクターIF の定義（2008 年度の IF）は過去２年間（2008 年度から見れば、2006 年度と 2007 年度）の被引用数と掲載論文総数の単純平均である。なお、現在では、5 年インパクトファクター 5-Year Jounral Impact Factor というのも発表されている。

(3)対象は、トムソン社の Web of Science に収録されたジャーナルが対象となっている。これに掲載されるには 3 年間トムソン・ロイター社に e-journal を除き現物コピーを送付し続ける必要がある。これを参考に、トムソン社自身が採用を決定する。トムソン社は自身の Web of Science に収録された reference を通じて独自に Web of Science の枠外のジャーナルを評価している。
　選定基準
3-a)編集慣行が国際的書式を満たしていること、書誌情報も完全であること、ピアレビューが確立していることなどが基礎的前提
3-b)当該誌が分類されるジャンルはトムソン社自身が決める。
3-c)著者および編集陣が国際的多様性を満たしていること。
3-d)引用データによる評価。

注）Web of Science は採録されたからといって、恒久的に採用が継続されるわけではなく、改廃がある。

(4)選定基準にかんする新展開
4-a)地域性の考慮
　最近、地域コミュニティの発展、アジアからのジャーナル貢献が目覚ましく、総雑誌数のシェアで増加が著しい。そこで、国際性と並んで地域性を考慮するようになった。Regional journal の拡大の観点から、とくに 2008 年 5 月に Web of Science に 700 誌を追加した。地域性とは被引用数からのインパクトではなく内容の特殊性（その地域でしか得られない）からのインパクトを重視する選定基準のことを指す。日本の電気学会の IEEJ Transaction on Electrical and Electronic engineering は日本の雑誌が引用しているトップ 100 のジャーナルであったが、これまで

Web of Scienceに採録されていなかった。しかし、日本という地域を重視すると、いかに重要な雑誌かわかる。

4-b)引用データによる評価の多様性の考慮
現在、JCR (Jounral Citation Report) の指標は全部で5個ある。
Total Cites 被引用総数
Impact Factor　文献引用影響率
Immediacy Index　最新文献指数　(対象年に出版された論文が同年中にどれだけ引用されているかを示す)
Articles　論文数
Cited Half-Life　被引用半減期　(ジャーナルに掲載された論文がどれだけ長い期間引用され続けるかを示す)
Citing Half-Life　引用半減期　(ジャーナルに掲載された論文がどれだけ古い論文まで引用しているかを示す)

(5)ジャーナル自誌引用について
5-a) 意図的な引用率を引き上げのケース
意図的に自誌の引用率を高めて、その結果、90パーセントの被引用が自誌からの引用であるというジャーナルがあった。この場合、悪質と判断し、インパクトファクターの順位からそのジャーナルは除外された。しかし、このケースでは、Web of Scienceの登録の削除は行わなかった。
5-b)自誌引用と主題の特殊性との相関傾向として、特殊なトピックスを扱うジャーナルの自誌引用率は高くならざるをえない。なぜなら、その雑誌以外に投稿することもできず、その雑誌からしか研究もできないからである。例。歯科の根の治療 endodontics など。扱う主題が一般的になるにつれ、他紙からの引用論文も増え、同時に、その雑誌の論文も他誌から引用されるようになる。

(文責　有賀裕二)

「進化経済学 Working Papers」開始のお知らせ

本プロジェクトは、論文指導を通じて若手研究者の育成をおこなうことを目的としたものです。また英語論文の執筆、EIERへの投稿を促進し、学会の国際的な研究発信能力を高めることを目的としています。
　40歳未満の研究者であれば学会員であるか否かを問わず利用することができます(非学会員の場合は、学会員の推薦が必要)。お知り合いの若手の研究者にぜひお声をかけていただいて、登録・投稿を勧めていただければ幸いです。
詳しくは、
http://room409-1.ih.otaru-uc.ac.jp/~ysg_work/index.html
をご覧ください。

なお、分野によっては学会員の皆様にも、指導等のお手伝いをお願いすることがあります。その場合には、できる限りで結構ですのでよろしくご協力お願いします。
　なお、プログラムとwebsiteの管理につきましては、

江頭進(小樽商科大学)
小川一仁(大阪産業大学)
小山友介(東京工業大学)
吉野裕介(日本学術振興会特別研究員)
がおこないます。お問い合わせは江頭(egashira@res.otaru-uc.ac.jp)まで。

編集後記

今回も編集が遅々として進みませんでしたが、ようやく発行することができました。発行にご協力いただいた諸先生方に感謝いたします。今回は、EIERのパンフレットを同封しております。**ぜひ海外の友人、知人の研究者の方に購読を薦める際に積極的にご利用ください。**また、第14回大会案内(サマースクール、オータムカンファレンス含む)も同封いたしておりますので、是非ともご参加いただきますようお願いいたします。

編集担当・小川一仁(大阪産業大学)